

## はじめに

当連載のフィールドである上町台地界限には、これまでも繰り返し紹介してきたように、多くの学校や神社・寺院をはじめ、たくさんの方々が残るまちやコアアタウンなど、多彩な地域資源の魅力的な集積がある。一方で、高齢化や世帯の小規模化、マンション居住者の急増などを背景にした、新たな地域の課題も浮かび上がってきている。かつて地域が担ってきた安心・安全を支え

己と他者の「つながり」の回路の形成に着目し、その原点となる子どもとまちの関係性のありようを見つめた。今回、連載第19話では、NEXT21第3フェーズ居住実験の振り返り点で、U・C・O・R・Oプロジェクトの第1回目から第9回目までの展示やイベントを通して、地域の方々と共に共有してきた貴重な情報や経験をもとに作成した、『上町台地つながりのスタイルブック』を紹介する。人と人、人とまちの関わりを豊かにしていく、上町台地ならではの「つながり」のスタイルを伝えるツールである。

弘本 由香里

Written by Yukari Hiromoto

大阪・上町台地発  
都心居住文化の創造へ  
(第19話)

つながりのスタイルを共有し、  
新たな視点を得るツール

る力が及ばない対象や見守りの隙間が増大しつつある。こうした認識のもとに、NEXT21第3フェーズ居住実験の一環として、「U・C・O・R・Oプロジェクト」(※1)を展開してきた。

地域の生活単位のありよう自体が大きく変化していきなから、地域の力を引き出していき、ソーシャル・キャピタルの再構築のためには、つながりのデザインが重要な役割が欠かさない。それが、U・C・O・R・Oプロジェクトを貫く考え方である。当連載第18話では、とりわけ重要な基盤となっていく「自己と風土のつながり」の回路と「自

当連載で何度か取り上げてきたように、U・C・O・R・Oプロジェクトでは、柱となる大テーマ「地域文化の再生見」(※2)「多世代・多文化の共生」(※3)「減災文化の創造」(※4)「自然・環境の再生」のもとに、具体的なテーマを設定し展示やイベント等のプログラムを展開してきた(※5)。『上町台地つながりのスタイルブック』は、第1回から第9回のプログラムを1冊(60ページ)にまとめ再編集することによって、個別のプログラムに関わった方々が、時間軸、空間軸、関心軸を往き来する視点を得、新たなつながりを実感し、視野や可能性の広がりを自ら物語るこ

つながりのスタイルの中に、誰もが身を置いてみやすいように、スタイルブックの編集にあたって、第1回から第9回のプログラムを、特徴的な4つのつながりのスタイルに分類し、次のようなコンテンツとして再構成している。

■ Style 1 上町台地の時空につながる扉から  
 (1) 春・夏・秋・冬 まつりをめぐる、(2) 子どもと遊び いま・むかしをたずねる、(3) 緑と鳥いのちの回廊をたどる

## 『上町台地 つながりのスタイルブック』の構成

のできるツールとなればとの願いを込めてつくったものである。

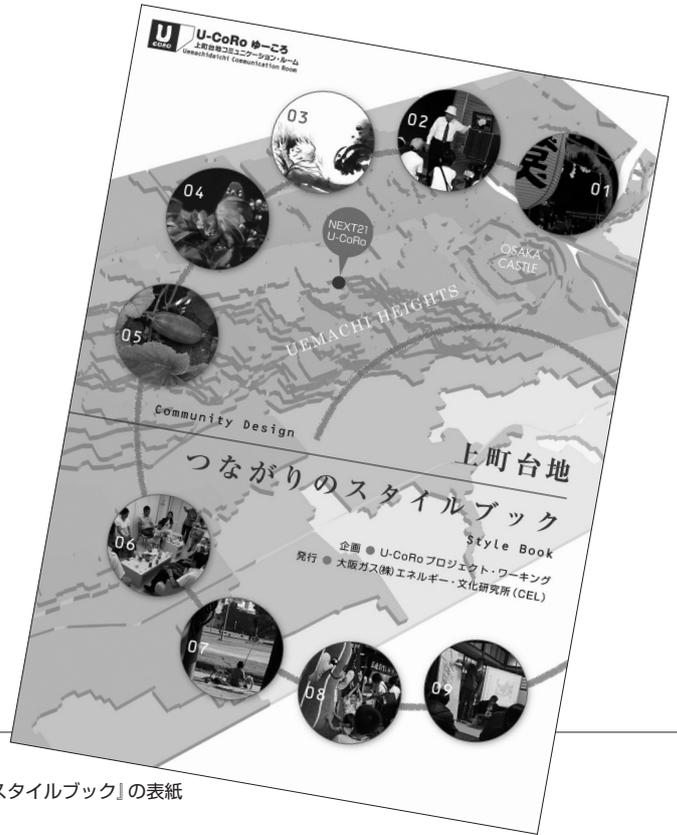


図1 『上町台地 つながりのスタイルブック』の表紙

### Style 1

## 上町台地の時空につながる扉から

上町台地の時空につながる第1の扉は「まつり」です。古代の祭礼から現代のフェスティバルまで、人が暮らすまちだからこそ、上町台地には数々のまつりが息づいています。時を越え、この地に刻まれてきた人々の願いにふれる入り口として、絶えることなく繰り返されるまつりをめくります(1)。

第2の扉は「子どもと遊び」です。路地や坂道、鎮守の森などの緑や産地の多い上町台地は、子どもたちにとって格好の遊びの舞台でもありました。子どもたちの創造力を豊かに育む、遊びを介したまちや自然との交わりのいま・むかしをたずねます(2)。

第3の扉は「緑と鳥」です。上町台地に点々と連なる緑は、遠く音から受け継がれてきた、いのちの回廊です。身近なまちの樹木と鳥たちの姿を追って、悠久のいのちのつながりをたどります(3)。

(1) ワンドウ「エシレーション01『上町台地まつり総集』(2007年2月5日〜4月20日)、(2) ワンドウ「エシレーション02『上町台地子どもと遊び』(2007年4月14日〜6月3日)、(3) ワンドウ「エシレーション04『緑と鳥の回廊』上町台地(2006年1月21日〜5月9日) 4/5月16日(祝日)もももに構成。なお、文中の画像・写真はそれぞれの表示した場所のものもです。

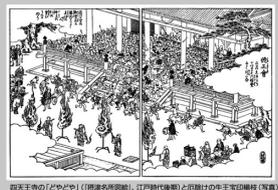


図2 『上町台地 つながりのスタイルブック』 Style 1の冒頭ページ

## 春・夏・秋・冬まつりをめぐる

数々の社寺が並び立ち、今も歴史の舞台そのものの姿を宿す上町台地。ここは、浄土信仰の聖地として、あるいは巡礼の道として、古来、多くの人々が行き来した地でもありました。上町台地の祭礼や年中行事、まちの生活文化を紐解いていくと、まつりに刻まれてきた人々の思いや願いの深さに気づかれます。同時にそれは新たなまつりを生み出す、まちのダイナミズムを感じることもつながるものでしょう。

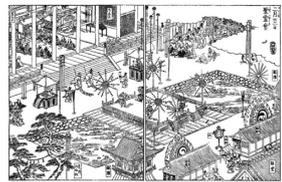


図3 上町台地の時空につながる扉から

## 春

四季折々に展開する上町台地のまつり

## 夏

## 秋

## 冬

過去から現在まで、上町台地に息づいてきたまつりのダイナミズム

古くからの伝統が受け継がれるとともに、新しい動きが生まれています。

春

- ◆3月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆4月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆5月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆6月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆7月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆8月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆9月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆10月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆11月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆12月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮

夏

- ◆1月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆2月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆3月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆4月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆5月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆6月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆7月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆8月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆9月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆10月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆11月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆12月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮

秋

- ◆1月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆2月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆3月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆4月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆5月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆6月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆7月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆8月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆9月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆10月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆11月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆12月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮

冬

- ◆1月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆2月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆3月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆4月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆5月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆6月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆7月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆8月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆9月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆10月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆11月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮
- ◆12月 ◆ 三光神社の大祭 三光神社 高津宮

Style 2 まちで育む地野菜とつながり

(1) なにわ伝統野菜から広がる人の輪、(2) 玉造黒門越瓜栽培でツルつながり

Style 3 日常から減災へ思いをつなぐ

(1) 風土特性と災害リスクに思いを馳せる、(2) 全国のいのちを支える智慧に学ぶ、(3) 減災ゲームでその日その時に身を置く

Style 4 本でつながるネットワーク

(1) 52人の大切な一冊とお気に入りの場所 (その他) 協力者一覧/付録など

Style 1 上町台地の時空につながる扉から

Style 1 は、上町台地の時空につながっていく入り口として、3つの扉を設定している。第1の扉は「まつり」(※3)である。古代の祭礼から現代のフェスティバルまで、人が暮らすまちだからこそ、上町台地には数々のまつりが息づいている。時を越え、この地に刻まれてきた人々の願いにふれる入り口として、絶えることなく繰り返されるまつりをめぐる扉である。

第2の扉は「子どもと遊び」(※4)である。路地や坂道、鎮守の森などの緑や崖地の多い上町台地境界は、子どもたちにとって格好の遊びの舞台でもあった。子どもたちの創造力を豊かに育む、遊びを介したまちや自然との交わりのいま・むかしをたずねる扉である。

第3の扉は「緑と鳥」(※5)である。上町台地に点々と連なる緑は、遙か遠い昔から受け継がれてきた、いのちの回廊でもある。身近なまちの樹木と鳥たちの姿を追って、悠久のいのちのつながりをたどる扉である。

Style 2

まちで育む地野菜とつながり

子どもから高齢者まで、一般市民から専門家まで、世代や立場を越えて、みんなの心をとらえてやまないもの。地域の伝統野菜ほど、人と人をつなぐやわらかな力のあるものはないといってもいいかもしれません。

上町台地がふるさとの、玉造黒門越瓜(たまつくりくろもんしろり)や天王寺蕪(てんのうじからふ)も、まちの人たちの願いを受けて、芽を吹き、根を張り、花を開き、実を結び、たくさんの物語を紡ぎだしています(4)。

玉造黒門越瓜栽培「ツルつなぎ」プロジェクトも誕生しました。上町台地界隈のいくつかの幼稚園や学校、神社やお寺、お店やお家で、ひとつまたひとつと越瓜が芽吹き、園庭や校庭に境内に軒下に庭先に、たくさんの出会いと会話を届けています。越瓜の成長とともに、「ツルつなぎ」の人の輪が広がっていきます(5)。

その広がりに、いのちを支える食と暮らし、まちの未来への思いが広がっています。

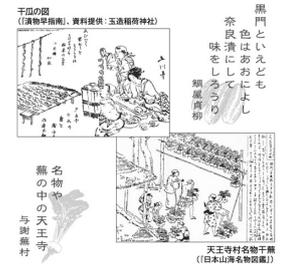
(4) ワンドフ、エキジブソン(5)「上町台地となにわ伝統野菜展」(2009年5月10日～8月29日)※9月12日まで展示延長。(6) ワンドフ、エキジブソン(8)「上町台地 玉造黒門越瓜栽培」ツルつなぎプロジェクト(2009年5月25日～9月4日)をとおもに構成。なお、文中の「所属」はそれぞれの展示イベントの所属のもの。



NEXT21 展上の菜園で、なにわ伝統野菜を収穫(2008年8月)

なにわ伝統野菜から広がる人の輪

風土が育む地野菜の、個性あふれるその姿形や、しっかりとした味わいには、まちの歴史と文化が詰まっています。今、なにわ伝統野菜があちこちで息を吹き返しています。上町台地がふるさとの、玉造黒門越瓜(たまつくりくろもんしろり)や天王寺蕪(てんのうじからふ)も、まちの人たちの願いを受けて、芽を吹き、根を張り、花を開き、実を結び、たくさんの物語を紡ぎだしています。



近世・近代の都市と近郊農村が織りなした至福「なにわ伝統野菜」

都市とそのすぐ近郊の農村という関係は、近世には厳しい身分制度などを背景に持つとも、農村=生産、都市=消費という単純な図式ではなく、持ちつ持たれつのであった。都市も農村も個々に暮らしや文化を育み、互いに尊重もしていました。なにわ伝統野菜はそうした往時の都市と近郊農村が織りなした至福の産物でもあったのです。

近代以降工業化が進みましたが、とりわけ高度経済成長期以降は第一次産業が軽んじられ、都市は膨張も膨らみしました。また、田畑は「高度利用されていない地」、農業は「低付の産業」という価値観も広がりました。歴史と文化、一般には「社会は時代とともに発展し、人間の暮らしも豊かになる」という発展史観でながれがちですが、そういう見方が置かれたこと、近年私たちはようやく気づきつつあるようです。

復活してきた伝統野菜を味わいながら、私たちがこの数十年で失ったものに思いを馳せてみてはいかがでしょう。そして都市や都心居住の本来的あり方などを振り返り、これからの上町台地、大阪を考える「滋養」としていただければと思います。

北川 典  
大阪城天守閣研究員 主幹

復活してきた「なにわ伝統野菜」

大阪の肥沃な土が育んできた地野菜の数々は、都市化のなかで、いったんは姿を消してしまいましたが。これらの地野菜は、栽培される地域や季節などが限定されるものですが、それだけに長きにわたって大阪の食を支えてきた歴史と伝統をもつものです。なにわ伝統野菜の個性豊かな姿と本物の味わい、いま新たなスポットが当てられています。

- ① 毛馬胡瓜(けまきゅうり)・大阪市東区
- ② 服部越瓜(はつべしろうり)・高槻市東部
- ③ 玉造黒門越瓜(たまつくりくろもんしろり)・大阪市中央区
- ④ 勝間南瓜(かつまなぼろ)・大阪市西成区
- ⑤ 水茄子(みずなす)・貝塚市
- ⑥ 鳥飼茄子(とりかひなす)・堺市
- ⑦ 田辺大根(たなべだいこん)・大阪市東住吉区
- ⑧ 守口大根(しゅくちだいこん)・大阪市北区
- ⑨ 大阪四日大根(おおさしよだいこん)・豊中市住本町
- ⑩ 天王寺蕪(てんのうじからふ)・大阪市天王寺区
- ⑪ 空母人蔘(くもじんじん)・大阪市東淀川区
- ⑫ 石臼草子(いしうす)・津南(石川)
- ⑬ 蓮根(れんこん)・守口市、門真市
- ⑭ 吹田慈葱(すいたあきしるな)・吹田市山田団
- ⑮ 大阪しろな(おおさしろな)・大阪市北区
- ⑯ 独活(ひと)・京都市太田、千早



「なにわ伝統野菜」からはじまる、地域と食への関心の深まり

伝統野菜は、昔はそれぞれの地域でごく普通に食べられていたものです。かつては、地域ごとに特徴ある食材があり、旬の食材を使った美味しい地域の食文化がありました。ところが最近では、スーパーで売られている野菜なども、どこから来たもので、誰がどのようにして作ったものかわからない、あるいは感じ取れないものばかりです。

大生産や周年流通が求められる時流の中で、いつしか頼みられなくなった大阪の伝統野菜。しかし、それらは大阪の環境で育てられ生き残った野菜です。昔ながらの野菜の味をその旬の時期に味わうことの意義を、私たちはもう一度考え直さなくてはならないでしょうか。風土に合った地産の野菜を食べることが、最も味わい深く、しかも安全でもあるのです。これは、大人にとっても子どもにとっても、大切な食や健康についてしっかり考えることにもつながることでしょう。

うれしいことに、いま大阪では伝統野菜への関心が高まっており、各地の学校などでの栽培や地元行事での料理づくりも、復活・保存活動の輪が広がっています。大阪の伝統野菜からはじまる、地域と食への関心の深まりに、私たちは思いを寄せています。

森下 正博  
なにわ伝統野菜振興員 農学博士

図3 『上町台地 つながりのスタイルブック』 Style 2の冒頭ページ

## Style 2 まちで育む地野菜とつながり

Style 2は、子どもから高齢者まで、一般市民から専門家まで、世代や立場を越えて、人々の心をとらえてやまない、地域の伝統野菜という媒体の可能性に着目し、地野菜を介した人と人とのつながりの妙を伝えている。

前段として、上町台地がふるさととの、玉造黒門越瓜や天王寺蕪が、まちの人たちの願いを受けて、さまざまな再生の物語を紡ぎだしている様子を紹介している(※6)。後段では、玉造黒門越瓜栽培ツルつなぎプロジェクトの誕生へ展開。上町台地界隈のいくつかの幼稚園や学校、神社や寺院、お店や住宅で、ひとつまたひとつと越瓜が芽吹き、園庭や校庭に境内に軒下に庭先に、たくさんのお会いと会話を届けている様子を伝えている(※7)。越瓜の成長とともに広がるツルつなぎの人の輪。その広がりに、いのちを支える食と暮らし、まちの未来への思いを重ねてみる事ができる。

## Style 3 日常から減災へ思いをつなぐ

Style 3は、日常から減災へ思いをつなぐ智慧を照らし出している。全国各地で災害が頻発し、誰もが等しく将来の被災地・被災者になり得る日々を生きている。上町台地も例外ではないが、その日を想像するのは容易なことではない。

そこでまず、上町台地の災害史を振り返るとともに、

## Style 3

### 日常から減災へ 思いをつなぐ

誰もが等しく、将来の被災地・被災者になり得る日々を生きています。上町台地も例外ではありません。けれど、その日を想像するのは容易ではありません。日常から非日常を見つめる手がかりの一つに、数々の被災地で培われてきた智慧を丹念に紡いだ1冊のストーリーブック「いのちをまもる智慧を伝える 減災に挑む30の風象」があります。そのころを上町台地で受け止め、その日に思いを馳せ(※8)。

もう一つの手がかりが、もしもの場面に身を置いてみることのできる減災ゲーム「クロスロード」です。お寺や神社が並ぶあまのまちで、多文化が息づくあまのまちで、長屋が残るあまのまちで、新しいコミュニティ、時を重ねたコミュニティで、浮かび上がってくるさまざまな声と動き(9)。

二つの手がかりとネットワークから、地域に根ざす土の人と、地域外から智慧を運ぶ風の人とともに歩む減災への一歩が生まれます(※9)。

(※8) ワンドウ・エキジション09「いのちをまもる智慧を伝える 減災に挑む30の風象」と上町台地講座(2007年9月10日・12月29日・2008年1月18日)まで展示販売。(ワンドウ・エキジション09「減災ゲーム」で遊ぶ「上町台地の暮らし」(2008年9月18日～2009年1月29日)。(※9) ワンドウ・エキジション09「減災ゲーム」(on.上町台地の暮らしから」(2009年9月7日・2010年1月29日)をもとに作成。なお、文中の画像・所載はそれぞれの表示・イベント掲載のものとする。



宝戸台(1934年9月)被災後の復旧が進む。校庭で授業(大阪城天守閣)

### 風土特性と災害リスクに 思いを馳せる

水の都大阪は、古くから洪水や津波による被害を受け、火事や地震などの災害にも見舞われてきました。なかでも、幕末の1854年(安政元)には、大地震が2日うちに連続して発生し、2度目の地震の直後には山のような大津波が市街に押し寄せました。戸外に避難していた多くの人々が大波にのまれたのです。

周囲より高い位置にある上町台地でも、近年に至るまで何度か台風の直撃や集中豪雨などの風水害にあり、時には甚大な被害を受けています。また、住宅や商家が密集する大阪市街地は度々大火に見舞われ、その災は幾度となく台地の上にも燃え広がりました。

こうした災害は決して昔の話ではありません。大阪平野を南北に貫く上町断層帯が地震を引き起こした場合、そのマグネチュードは7.8にもなると推定されています。過去の事例から得るべき「智慧」は、まだまだ残されているのです。



### 上町台地周辺の災害略年表

BC1万年前後	この頃、上町台地が動いた可能性
686年1月	大蔵寺の火により観音堂全焼
1361年6月	近畿一大地震(四天王寺金堂倒壊)
1562年1月	大坂本願寺大火、寺中2,000名焼失
1580年9月	石山合戦の和後、本願寺は火災により焼失
1615年5月	大坂夏の陣にて、大坂城焼上
1724年3月	大坂大火(妙覚院、市街の2/3、12,205名焼失)
1757年9月	安堂寺横火近より出火し、台地で焼く
1783年12月	内平野町で出火(1,500名焼失)
1789年12月	南本町より出火(寛政の大火、上町まで57町を焼失)
1852年12月	上町で大火(東横組川から台町まで焼失)
1863年11月	大坂大火(新町、市街の2割焼失、玉造稲荷神社も焼失)
1868年1月	大坂城址 5月 淀川大洪水
1884年1月	内本町で大火(曲線、火は松屋を越える)
1912年1月	南の大火(舞臺新第一帯が焼く、4,576名焼失、生霊神社倒壊)
1934年9月	宝戸台風襲来(四天王寺堂塔や木造校舎など倒壊、死者1,812名)
1950年9月	ジェーン台風襲来(生霊神社本殿倒壊)

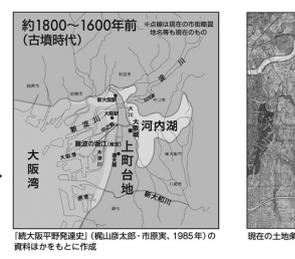
### 大阪平野の変遷



### 上町台地の成り立ちと災害リスク

縄文時代から古墳時代までの大阪平野の変遷を図ると、平野部の大半が陸地化してから開かないことが分かります。また、上町台地とその東側の河内平野を範囲とする土地条件図では、中央部を走る黄色の帯から300年前に付け替えられる前の旧大和川河道が浮かびます。さらに、平野部には自然堤防と呼ばれる微高地が点在し、昔の村はその上に立地していることも見えてきます。

こうした土地の履歴を念頭に置くと、ハザードマップの見方も違ってきます。例えば、比較的地盤がしっかりしていると言われる上町台地でも、農地分布に緩い強弱があることがうかがえます。また、内水氾濫時の浸水予想図では台地上にもわずかながら浸水が予想される地域があります。その背景には台地を覆む数々の谷、埋め立てられた池やくぼ地など土地の履歴も影響していることが分かってきます。「上町台地だから大丈夫」と過信せず、憂する土地であるからこそ、その変遷を見つめ直し、そこで暮らしていくための覚悟と工夫を怠らぬようにすることが肝心ではないでしょうか。



### 大阪市に 想定される地震の被害



図4 『上町台地 つながりのスタイルブック』 Style 3 の冒頭ページ



上町台地で生まれ、育ち、学び、働き、暮らす、一人ひとりの人生の折節、成長の過程に、大切な本との出会いやまちとの交わりがある。それぞれの「本」でつながる、上町台地の心の地図の向こうに、生き生きと血の通う上町台地がその姿を現している。

## 第19話のおわりに

第19話では、つながりのスタイルを共有し、活かしていくためのツールとしての『つながりのスタイルブック』の姿を追った。それは、街角の小さな情報拠点であるU・C・O・R・Oが引き出してきたつながりのスタイルのレビューであり、新たなつながりを生み出していくプラットフォームといってもいいだろう。

個々のプログラムを越えて、全体像を眺める視点を得ることで、実は「地域文化の再発見」「多世代・多文化の共生」「減災文化の創造」「自然・環境の再生」という大テーマも、個々のプログラムも、そこで紹介しているさまざまな活動や関心も、決してばらばらに存在しているものではなく、つながりあって地域や暮らしを形づくっているものであるということに気づかされる。そして、それぞれのつながりを意識しあつていくことで、地域の力はずっと高まっていくであろうというビジョンを、分かち合うことができる。

(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所特任研究員)

CEL

(※1) NEX T21第3フェーズ居住実験の一環としての地域コミュニケーションデザイン実験U・C・O・R・Oプロジェクトの概要等は、季刊誌「CEL」83号・84号・86号・88号・89号・91号・92号「大阪・上町台地発都心居住文化の創造へ」(第12話〜18話)及びU・C・O・R・Oホームページで紹介している。  
<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/>

ウインドウ・エキジビションや関連イベントは、U・C・O・R・Oプロジェクト・ワーキングが企画・運営している。2010年3月現在の同ワーキング・コアメンバーは、弘本由香里(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所/上町台地からまちを考える会、橋本護(Bitrain)、早川厚志(まちづくり工房/からほり倶楽部/上町台地からまちを考える会)。

(※2) U・C・O・R・Oプロジェクトの第1回目から第9回目までの展示やイベント等の概要は、U・C・O・R・Oホームページで紹介している。  
<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/>

(※3) ウインドウ・エキジビション01「上町台地まつり絵巻」(2007年2月5日〜4月28日)をもとに構成。

(※4) ウインドウ・エキジビション02「上町台地子ども遊びいま・むかし」(2007年5月14日〜8月31日)をもとに構成。

(※5) ウインドウ・エキジビション04「緑と鳥の回廊、上町台地」(2008年1月21日〜5月9日 ※5月16日まで展示延長)をもとに構成。

(※6) ウインドウ・エキジビション05「上町台地となにわ伝統野菜物語」(2008年5月19日〜8月29日 ※9月12日まで展示延長)をもとに構成。

(※7) ウインドウ・エキジビション08「上町台地 玉造黒門越瓜栽培ツルつなぎプロジェクト」(2009年5月25日〜9月4日)をもとに構成。

(※8) ウインドウ・エキジビション03「いのちをまもる智慧」を伝える減災に挑む30の風景と上町台地災害史」(2007年9月3日〜12月28日 ※2009年1月18日まで展示延長)をもとに構成。

(※9) ウインドウ・エキジビション06「減災ゲームで気づく上町台地の暮らしいろいろ」(2008年9月16日〜2009年1月23日)をもとに構成。

(※10) ウインドウ・エキジビション09「減災キャラバン on 上町台地」の道程から」(2009年9月7日〜2010年1月29日)をもとに構成。

(※11) ウインドウ・エキジビション07「春の日上町台地で読みたい本」(2009年1月26日〜5月22日)をもとに構成。